

やまとの名品 天理図書館



はなのかがみ

まつだいらさだのぶ
松平定信編

文政5年(1822)写 2軸

縦30.6cm

春を告げる花といえは桜、毎年メデアを賑わす。野生種、自生種だけで百種程、交配種を含めると現在六百種以上の品種があるという。

館蔵に、松平定信（一七五八—一八二九）の文書「浴恩園画記」と総称される一箱がある。谷文晁画「浴恩園図記」など全十八巻を収め、うち、「梅津のなみ」以下九巻は、園中二万坪に栽培育成した草木花卉類の着彩写真図。「はなのかがみ」には、伊勢の不断桜、吉野の奥山桜など計百十九種の桜花が画かれている。八代將軍徳川吉宗を祖父に、御三卿田安宗武を父にもつ定信（幼名は賢丸）は、寛政の改革

で知られる清廉な政治家、そして趣味豊かな文人であった。安永三年十六歳で陸奥国白河藩松平定邦の養子となつて定信と改め、二十五歳で第三代藩主に。四年後の天明七年老中首座となり幕政立て直しに尽力、隠居後は江戸築地の下屋敷浴恩園で楽翁・花月翁と号し悠々自適、文雅の生活を楽しむ生涯であった。

掲出は、上巻初頭。自筆跋文に浴恩・春秋両園中の梅桃桜の三花を画かせて永く春をのこさんと試みたと。更に今年の春より始めて、以下毎年書き足すつもりであるといい、「文政五のとしやよひ廿九日花月翁しるす」と結ぶ。各図に付した花の



名は定信筆。カットは箱蓋に書かれた目録で、側近田内親輔筆。万葉集以来文芸全般、又精神的象徴としても扱われる桜は、今も日本人にとつては、愛される話題・関心を集める特別な存在である。（天理図書館 内藤和子）